

# 第1回 上田市教育行政のあり方を考える有識者会議

平成19年1月10日(水)午後2時10分から  
上田駅前ビルパレオ5階会議室

## 出席者

上田市長 母袋創一

## 有識者会議委員

荒井裕司委員、斎藤繁子委員、齊藤忠彦委員、佐藤智恵子委員、清水卓爾委員、戸田忠雄委員、  
中村和幸委員、日比英子委員、廣川岩男委員、福井秀夫委員、宮尾秀子委員、宮坂公子委員、  
宮澤怜子委員

## 事務局

政策企画局長小林憲和、秘書課政策副主幹林克臣、教育務課総務企画担当係長井出章

## 傍聴者

一般 5人

報道機関 12人

## 1 開会

小林政策企画局長(座長就任まで進行)

## 2 委嘱書交付

予め各委員机上に委嘱書配布済みのため委嘱書交付は省略

## 3 市長あいさつ

## 4 委員紹介

荒井委員から席順(50音順)に沿って自己紹介

委員紹介に続いて事務局自己紹介

## 5 座長、副座長選任

事務局(小林政策企画局長):

それでは紹介が終わりましたので、次に座長の選任に入らせていただきたいと思います。私どものこの会議の設置要項の第4条の規定によりまして、この会議にですね、座長、副座長を置くことになっております。これによりまして、座長につきましては、委員の皆様の互選ということでございます。又、副座長は座長が指名をするという決めにしております。最初にこの座長の選任についてお図りをしたいと思います。いかがでございましょう。

福井委員：

事務局に案があったらお願いします。

事務局：

今、福井委員の方から事務局の方に案があったらというご意見でございます。他にございますでしょうか。無いようですので、事務局の方で用意をさせていただきますことで提案をさせていただきたいと思いますが、よろしゅうございますでしょうか。

- 委員承認 -

はいありがとうございます。それでは私ども事務局の方から座長を戸田委員さんをお願いをしたいと思いますが、いかがでございましょう。宜しくお願ひしたいと思ひます。

拍手

ありがとうございました。委員の皆様の全員の賛同をいただきまして、戸田委員さんに座長をお願いをしたいと思ひます。それではこちらの方の座長席の方にて、これからの議事の方の進行をお願いをしたいと思ひます。宜しくひとつお願ひします。

戸田座長：

設置要綱によりますと副座長を座長が指名するということになっているようでございますので、それでは副座長を私の方で決めさせていただいてよろしゅうございますか。それじゃあ荒井委員をお願いしたいと思ひますが、よろしゅうございますか。荒井委員、宜しくお願ひいたします。

## 6 議 事

戸田座長：

それでは今、2時40分でございますので、この種の会議の第1回は、自己紹介とか儀式で終わるケースが多いのですが。東京や長野など非常に遠くからわざわざ上田市の改革の議論のために来ていただいておられます。また、税金の効率的な活用ということで、なるべく効果のある、或いは密度の高い議論をいたしたいと思ひますので、一応、今日5時頃まで予定させていただきたいと思ひますが、よろしゅうございますか。あと途中でちょっと中休みをとりたいと思ひます。やっぱり平均年齢が高いものですから、.....

それでは最初に私の方から少しお話しをさせていただきまして、それから副座長も含めて委員の先生方からも一通り抱負といひますか、そういうものをお話しさせていただきたいと思ひます。

最初にちょっと、先程の市長さんのお話しを敷衍してお話しを申し上げないと、この会の具体的な審議内容、或いはスケジュールのようなものがあまり明確になっていないということがございますので、私の方で少し申し上げたいと思ひます。先ず、先程の市長さんのお話しを伺ってしまして、生活者視点と地域の経営とその2つの視点から上田市の教育並びに教育行政全般を見直して検討しようと、そういうお話しがございました。それは私の言葉で翻訳しますと、生活者視点というつまり学習者、学校で学ぶ者の立場と視点から検討しようと。これは市長さんも先程、学校で学ぶ子供達の視点に立ってということをおっしゃっ

ておりましたけれど、正にこれが非常に大事な視点だと思います。どうしても教育や教育行政を論じますと、国とか文科省とか教育委員会とか学校の教師とか上の方から見る、そういう視点から或いはそういう立場から改革、指導をするというケースが多いわけでございます。あくまでもそこで学ぶ者の立場で議論を進めていきたいというふうに思っております。

それから2番目に組織を代表して出てきていただいているようなかたちの方もおられますけれど、これは組織代表というよりは、たまたま例えば校長会とか、或いは教職員組合、PTA、学校評議員会等という立場の方にも加わっていただいたというふうにお聞きしておりますので、組織代表ということではなくて、オフサイト ミーティングのように立場を離れて個人のお考え、ご意見をお出しただければいいのではないかと。どうしても組織代表となると組織決定とか組織の意向に縛られるということになりかねませんので、その点は自由な立場でご意見をお出しただきたいというふうに思います。

それから3番目にこれは普通は失礼な言い方ですけども、中央官庁或いは地方の自治体でも、お役所はこういう審議会とか検討委員会をやる時は、大体、事務局がシナリオをつくっておいて、落としどころをつくって話しをもっていくというケースが多いわけですが、実はこれはシナリオも落としどころもございません。だから事務局もどういう話しをどうやって、どういうふうなんだってということじゃないかと思いますが、集まった委員の皆さんもそうだと思います。私もそうでございます。従いまして、本当の意味での自由な立場から開かれた会になるのではないかとこのように思っております。4番目に議題につきましては市長さんから、やはり市民から問題提起されるという様々な課題とそれから加えて市長ご自身の問題意識も含めて提起されているのではないかと思います。従いまして、その線にそって議事を進めて検討していくということがよからうというふうに思っております。

それでは私の方でちょっと時間をとりますけれども、先程、市長さんの方で要約したお話をいただきましたが、事前に委員の方にはかなり詳しい具体的審議内容というのが送られてきておりますので、それについて少し問題提起をしながら進め方をご提案を申し上げたいと思います。

先ず、大きな1として、上田市教育行政の現状と課題の提起となっております、そこにいじめ、不登校といった教育課題の現状、教職員を取り巻く状況、地域の教育力の現状と課題、こういうふうになっております。これは簡単にいえば現状分析ということでございますので、今日はまずそこから入ることになると思いますが、ただ現状分析と申しましても上田市独自の課題もございまして、全国の中での上田市の一つの課題は何かという全国的な視点から見ること重要だと思いますので、手がかりとなる資料として内閣府の調査。これは保護者に対する学校制度のアンケート調査というのがございます。この資料でございますが、その中でポイントになるようなものを事務局の方でダウンロードして、今配布してあると思っておりますが、それを元にしながら同時に上田市の現状を重ね合わせて現状分析をしていこうというふうに考えております。

それから2の上田新時代の人づくり(教育委員会のあり方)、ここに1として学校経営のあり方。これは先程、市長の方からお話をうかがいました。学校現場のあり方、つまり学校現場の権限と責任のあり方に関わることであろうというふうに思います。それから(2)に教員評価制度のあり方。この提起の仕方は若干括り方にアバウトなところがあるような気がいたしますけど、これはまたご検討いただくとしまして、ちょっと申し上げますと、(2)が教員評価制度のあり方、それから学校選択制度のあり方、教育予算(教育バウチャーを含む)のあり方、この3つは本来並列にしておいた方がよろしいかというふうに思います。それは3点セットのようにして……それから(3)が幼・保・小・中一貫教育に向けた課題及びそのあり方、これはおそらく幼保一体、例えば認定子ども園のような問題かなというふうに思います。それから小・中一貫の教育と

というのは、これはどういうふうにか考えるかという問題ではなからうかと思っております。そういうふうには整理させていただきます。それから(4)の地域と学校の関係、地域が支える人づくりというのは、これは現在は構成上は学校評議員制のようなものがございまして、そういうものの人的な構成だとか或いは地域との連携の見直しとかいうことにつながるのかというふうに理解しております。それから3の国、県、市町村の役割と責任、これがポッチが3つ並んでおりまして、国のほうで検討が進められている(教育行政のあり方)に対する市としての考え方。これのいわゆる教育委員会制度が地方自治法に必置規定となっている。その必置規定をこういうふうにか考えると、これはもう国レベルの話でございますけれども、それに対してさまざまな意見がございまして、国のことだから議論する必要はないということではないと思っておりますので、この会としてそれに対してどのように考えるかという議論をする。それからその次のポッチは市長部局と教育委員会、それぞれの所掌事務の見直し。これは現在の構成上、特に昨年の内閣の骨太の方針以来、又、今年の中間答申でも教育委員会の一部の権限を市長部局に委譲するということが法令上可能であるというふうになっておりますので、それについての検討だと思っております。そのポッチの3番目の教育基本法に想定されない事務の市長部局への移管。これも上と関わるとは思いますが、そこで私の方の整理としましては、大きな1と2の(2)ですね、つまり上田市教育行政の現状と課題の整理と上田新時代の人づくりのあり方、その教育予算(教育バウチャーをふくむ)のあり方、そこまでを出来ればスケジュールとしては3月一杯で中間の報告を致したいと。従って3ヶ月でその1と2の途中まで議論を進めたいと。先程市長の方からお話しがございましたとおり、出来るだけ早い時期にある程度見直しを出してもらいたいというお話しがございました。これは全体についても通じることでしょうし、又、部分としても共通する問題だということに思っております。ということで、それから(3)の幼保とか小・中、それから大きな3の国、県、市町村の役割と責任、これは今年4月から一応10月ぐらいまでの間に通じて検討すると、と、申しますのは、国の方での教育委員会の必置規制の廃止問題、規制緩和の問題は丁度4月以降議論されるというふうに思っておりますので、それに合わせれば丁度4月以降にした方がよしいのではないかとこのように思っております。10月に最終的には報告を市長の方に出させていただきますと、その中で制度設計で、来年に間に合えのにつきましては、おそらく市長さんの方で教育委員会と協議をなさって12月の市議会に場合によっては間に合うということもあると思っておりますので、10月を目処にして進めていきたいと思っております。従いまして1月から3月まで、一応4回大体1回で3時間、12時間ぐらいやりまして、中間報告を出したいと、4月以降も1回平均3時間、足りなければ5時間、一応だけどなるべく平均の実質審議を少し長くとりたくたいと、そのようなことで進めてまいりたいと思っておりますが、それから、もう一つですね、これは結論は無論報告といったかたちになるわけですが、皆さんの御意見の開陳そのものが非常に大事なものですから、これは完全に議事録も逐語的な議事録をホームページに公開すると。情報公開は決定していただくと、これは小林局長さん宜しいですね。

事務局(小林政策企画局長):

そういったことでお願いします。

戸田座長:

有難うございます。お金はかかると思っておりますけれども是非、要約ではなくて逐語的な議事録の作成をお願いします。それからその他のメディア、或いは、一般の市民の傍聴も全てOKと。何も隠すことはないわけでございますから、原則として情報を公開となっておりますけれども、情報公開は当然ということで、万一どう

しても不都合なことがあるのではないかという委員の方からもしご意見があった場合には、その都度それを検討すると。大体、却下すると思いますけど私が、出来るだけ会議を市民に対して開いて、開いて、上田は違うけど、一般的にお役所はなるべく隠して、隠してってところがあるから、私はなるべく開いて開いてと考えております。是非、忌憚なく率直なご発言をいただきたいというふうに思います。ちょっと長くなりましたけど、私としてはそんなような考えをもっております。

この辺についてご意見があれば、よろしゅうございますか、進め方としては、

では続いて副座長さんの方から御挨拶をお話ししていただいて、後は委員の皆さんからご発言を順次いただくか、或いはもう自由に入るか。どうでしょうか。副座長さん、話している内に考えてみたいとおもいます。

荒井副座長：

この大役を仰せつかりまして、出来るかどうか不安でございますが一生懸命やらさせていただきますので宜しくお願いします。

座長の戸田さんからお話しいただきました。私もこれからは(戸田座長の教育アナリストを受け)副アナリストというふうに先程思いました。副座長ということになると、自分の意見が言えないのかなあと思いましたが、そんなことには一切構わず、「何だお前それ違うじゃないか」ということになったとしても、それも制止をふりきって言わせてもらうところは、どんどん言わせてもらいたいなというふうに思っております。座長を何とか助けて、又、私も助けられたりしながら会を進めさせていただきたいと思っております。どうぞ宜しくお願いします。

私は先程もちょっとお話しをしましたように、30年間にわたって様々な子供達と関わりをもたせてもらいました。たまたま公園で遊んでいる子供達と仲良くなりまして、子供達が私の家に遊びに来るようになって、「勉強もみてやろう」ということになりまして、どの位の学力かと思って「1m は」って聞くと「100 cm」ってすぐ答えるし、「1 km」と聞くと「1000m」とすぐ答える。すごい答えが早い、優秀なんですね。「じゃあ 1m というどのくらいなんだ」と言うと、(両手を40, 50cmほど開いて)「このくらいかな?」と迷っているの、「これは駄目だなあ。これはもう実学じゃないと。お前達それは勉強にならない」と、生活体験も含めての勉強を指導しましたら、7人の親御さんがやって来まして「先生、うちの子供達を預ってくれ」と言われました。それで塾が出来ました。それがスタートで「学校に行けない子供達」、「中学浪人」、「高校中退生」、先程も(自己紹介の中で)申しましたように「軽度発達障害やLDの子どもたち」とも関わって参りました。

実は15年前にこうした子供達の為の学校が必要なんだと思って、仲間達と一緒に文部科学省に直談判い行きました。5人の超党派の国会議員にも同行してもらいました。文部科学省の課長と係長が出てきました。私達が3時間お願いしましたけれど「私達の関知するところではありません」の一点張。どうにもなりません。「これは駄目だ。自分達(民間)でやるしかない」と考え「東京国際学園」という学校をつくりました。それが今につながっています。

「学校というのを何とか変えていかなきゃ、これらの問題は解決しないんじゃないか」ということをずっと提案をし続けてまいりました。しかしそれが全く相手にしてもらえない。それならば文部科学省の中の生涯学習局ならいいだろうと。ここに入り込めば大正琴も英会話やギターの学校も該当する対象と認めてくれる。そこでいくつかの会議に出させてもらいました中から、少しずつ認めてもらうことができるようになりました。

今回のこの会議は、地方自治体が旗を掲げ、手を挙げ、自分たちの教育に対して自らが方向性を見出し、実践につなげようとするものです。大変に有意義だと思います。

昨年、ヨーロッパから友達がメールをくれました。旅行を扱っている友達なんですけれど、「この頃、日本に行きたくないっていうヨーロッパ人が一杯いて困ったんだ。私達商売あがったりになっちゃうんだ」って言うんですよ。「何、言っているんだ。日本は四季が素晴らしいし、景色も綺麗だし、そんな日本に行きたくないのはおかしいじゃないか」と私が言ったら、「親が子を殺し、子が親を殺し、子が子供を殺す。それが日常茶飯事的に起きている日本というのは、おかしいよと。絶対そんな国に行きたくないよ」と言っているって言うんです。「そんな国は世界各国の中でも日本しかないよ」って彼らは言っている。我々は日常的に慣れてしまっているけど、これはやっぱり外から見たらそういうふうに見える。それだとすれば、現状に対応して修正し、解決のために根本から手をうっていかねばならないと思います。どうやったら解決できるかということも含めて、こういった機会をいただきました。皆さんと一緒に私達でやれる事、或いは方向性が出せればというふうに思っています。戸田さんの背後からサポートして参りたいと思います。

戸田座長：

今の荒井さんの話を聞きながら、ようやく考えがまとまりましたので、今これからご発言をいただく、ただ一般論をいただいても仕方がありませんので、1 のいじめ、不登校について、自分はこういう認識をもって、こういう対策をとれば良いと思うという具体論を提示して混ぜながら、この2 つから先ず上田市教育行政の現状とか課題、いじめ、不登校を切り口としていきたいと思えます。それで最初1時間程議論をしていきたいと思えますので、是非、いじめ、不登校について自分はこう考えている。それに対して具体的にこういう対策が有効ではないかと、是非、具体論でお願いしたいと思えます。それでは挙手して自由にお願いいたします。どうゆう順序でも構いません。

宮尾秀子委員：

それでは少し話させていただきたいと思えます。

いじめということに関しては、私はCAP(キャップ)として子供達の暴力防止プログラムですが、ワークショップの中で去年も、1,600人ぐらいの子供達と出会っています。CAPプログラムの特徴でトークタイムという30分の相談の時間の時に子供達が色々な話をしに来てくれるんですね。

ワークショップは1時間ぐらいなんですけど、1時間のワークショップはザワザワとしたり、うるさかったり、ワークショップはいろいろなんですけれども、そんな環境の中で「ああ、今日はノリが悪いなあ」とか、色々感じていたりする時があるんですけど、そういうノリが悪かったりだとか、またザワザワしている、そういうクラスに限ってこのトークタイムに子供達が押し寄せて来て、3人のスペシャリストで相談を受けていますが、トークタイムが終らないというぐらい沢山相談に来ます。その中でやはり多いのが友達との関係。「いじめられているんだよ」という子と、CAPでは「いじめられていることを言っていないんだよ。誰かに相談していいんだよ。」とメッセージをしますので、初めて話していい人に出会ったみたいな感じで言ってきてくれます。

その中でもどの学校でもどのクラスにもこのいじめ問題というのはあるんだ、というのを非常に強く感じています。そういう意味では今の学校、いじめというのは学校の中で起きていますので、よく家庭の問題とか色々なこともその個人の問題とか言われていますが、学校の中で起きてるわけなので、学校という社会の中、今の学校の中にいじめが起きやすい環境がある。今の制度の中ではいじめは起きてしまうということではないかなあと思えます。なので学校の制度というものの対策、あり方というものを根本から改革をしていかないといじめ問題は無くならないんじゃないかなあというふうに思っています。

そして子供達が友達同士で悩んでいることも言うてくれるんですけど、先生からのいじめというか、先生が

脅していか、脅していうのはおかしいですけど、怒り方とか暴言みたいなものとかもあります。

いじめられたことを先生に話したんだけど「気にするな」って言われて「お前が悪いからいじめられているんだ。」とか「気にしない方がいい」とか言われて、もうそれ以上何も言えなくなったという。先生の対応によって子供が悩む。

そして先生のことで悩んだ場合も、行き場を失っている現状というのがあります。そしてもう一つこの頃行った学校で感じたのは、非常にクラスが一人ひとりが繋がらないで乱立しているんですね。その背景には何があったかという、先生がおっしゃっているのには、「この状況は、1年から3年生までの先生があまりにも厳しすぎて、そして子供達が学校にとってはいい子なんです。親にとっても「いい先生だ」という親も沢山いたらしいんですが、あまりの厳しさに子供が悲鳴をあげて問題にもなっていたこともあったらしいんですが、その4年生の担任を持った時に、給食で一言も喋らない、先生が挨拶をしてもシーンとしている。子供達の無表情というのがあって非常に驚いて、とにかくここを何とかしようと優しい態度で「何を言ってもいいよ」と接していたら、今までの不満を全て出してそこから今度いじめが始まっていったという。「でも、やっと出せたということで安心をしています」ということで、先生は厳しいことが良いことだということでやられた教育方針だったらしいんですが、先生の裁量によるいじめ背景というのもあるかなあと思うんです。

私のこの後の具体的な対策ということでは、このいじめ対策に関しては、予防と対応、そして治療という、本当にいじめに会った子供に対しての治療という3点に分けて考えていく必要があるんじゃないかなあと考えて、予防として出来ること、対応として出来ること、そして治療として出来ること、ということに分けて考えていかないとぐちゃぐちゃになっちゃうんじゃないかなあと思います。

予防として出来ることはやはり子供に直接届ける体験学習のCAPのようなものとか、今、県教委でやっているいじめられた経験のある講師派遣ですとかそんなことをやっていくこと。後、相談体制の強化ということで、これは一つ提案なんですけど、今スクールカウンセラーの配置ってというのが学校現場で行なわれていますが、いる学校といない学校があったりとか、そして一人だったりとか、子供達の声だったんですが、「どうして学校には相談出来る場所が少ないんだろう」ということで言われて、そしてその相談室に行ってもいつも一部の子に占領されていて、行きたくても誰も話を聞いてくれない。それ予約制になっていて、相談したい時に行っても相談を受けてもらえないということで、スクールカウンセラーの配置はとてもお金がかかる。1時間、5,000円とか、だからすごく専門職を雇うと大変らしいですので、ここに是非一般の方の相談にのれる第三者、地域のおじさん、お婆さんの導入って言ったらいけないですけど、配置をしていいたら、お金もかからないし、全くボランティアじゃないですけど、1回、1,000円とかそのぐらいでやっていける相談体制をつくったらいいかなあと思う。

ただ一つ重要なのは、相談にあたっていただける人には研修という聞き手になれる研修というのをやっていただいてからでないと、また説教みたいにされちゃうと困るので研修して。私は今チャイルドライン上田の運営委員もやっていますが、チャイルドラインの聞き手になるには、約10回の講習12,000円、自分で払って、10回の講座を受けて聞き手の研修をしてからやっています。そのような体制を組んだ一般の学校に行ける相談の人をつくっていくのが一番いいんじゃないかなあと思います。

齋藤繁子委員：

いじめで先生が原因ということで、私が体験したことをちょっとお話しをしたいと思います。ある、これはおばあちゃんから相談を受けたんですが、学校で先生が一人の子に対してかなり強い言葉で叱っていると、そのことが原因で他の子供達から阻害されるとか、ということがちょっと出てきまして相談を受けました。

実際、私は授業も見に行きました。その中で感じたことなんですけれども、やっぱり先生は多分その子にとってここが出来ないから一生懸命直そうとしているんですが、その言葉の使い方とかやり方、態度の示し方、やっぱり他の子から見ていると何となくいじめているというふうに感じるような扱い方がちらりと見えました。

子供って非常に何ていうんですかねえ、よく鳥の弱い鳥を皆で全部つつくという状況があるんですが、子供って意外と残酷なところがございます、何かそういうことがきっかけがあるとその子に集中して何かやるということが、これが多分一つのいじめにつながるケースではないかなと思っています。先生は本当に一生懸命でその子の劣っているところを直そうと思ってらっしゃる態度も充分みえたんですけれども、その叱り方とか誉め方によって子供達には非常に影響があるんじゃないかなあとということが分かりました。

それともう一点、私はこれはすごく問題だと思えますのは、その同じクラスのお母さん方にこういうようなことがあるので、是非学級のPTAで取り上げていただいて、皆で考えて欲しいことを申し上げたんです。そうしましたら「いや、うちの子は先生からちゃんとよくみてもらっていますから関わりたくない」とおっしゃる方が殆どでした。このことについては非常にこれはかなり問題があるなと思ひまして、これは子供というよりむしろ親がそういうようなことを助長しているのではないかなあとということで、一つの問題点だなあと思いました。一応、先程のお話しと関連しまして、そんな事実も申し上げたいと思います。

廣川岩男委員：

すいません私都合がありまして、ここで失礼させていただきたいと思ひますので、何も申し上げないで立っていくのは失礼になりますので、私の方から少しお願いしたいと。

戸田座長：

ちょっと今日水曜日で職員会があるものですから。

廣川岩男委員：

すいません今日は3学期の最初の職員会議ですので、是非一言職員に言いたいことがありますのでこれで失礼させていただきますが、いじめの中には沢山ありまして、靴を隠すとか、そういういじめ、或いは悪口を言うとか、暴力とか、非常に沢山あるわけなんですけれども、やっぱり本人がいじめと受けとめればこれはいじめだろうということで、職員にも話し、本校ではそんなような形でやっているわけなんですけれども、子供達はやっぱりいじめを受けると、不登校にもなりますし、朝の顔色が暗くなる。

私は今、出来るだけ学校にいる時は、朝、清明小学校は小さいですので、ずっと学校を回って、朝、子供達の教室を回りながら、挨拶し、少し会話が出来れば行っているんですけれども、やっぱり同じ子供でも毎日違うんですね。ですからそれを教師がどうやって見抜いていくか、ということが大事だし、全て子供を教師が1日見ているわけにはいきませんので担任が、やっぱり職員の連携をとりながら、とにかくそれぞれの子供の気付いたこと、担任と連絡を取り合う、一つは週に出来れば1回ぐらい、いわゆる生徒指導、子供の様子を連絡し合う、本当に短時間なんですけれども、そういうことをしながら子供の様子を見てやる。問題があれば全校でやっていく。そういうのはやはり職員間の連携が大事かなとそんなふう思っているわけですが、もう一つは先程、教師の言動によってそのいじめを誘発するという話が出ました。

これについてはですね、教師がやはり人権感覚を育てていかなくちゃいけない。それが欠けているとこ

ろがあると。子供達に人権感覚を育てるにはやはり教師自身の人権感覚を養っておかなければ駄目であると。その人権感覚を養ったその目で子供達を見てく。そんなことが大事かなと思って基本的なものを少しずつ毎日っていわけにはいきませんが、今やっているところで、非常に悲しい出来事もいくつかあるし、お父さん、お母さんからの訴えもある。本当に早く対応していくということと、よく話を聞いて受けとめるということが今大事かなとそんなふう思っているところでもあります。すいません時間がきておりますので失礼します。又、宜しく願いいたします。

戸田座長

あの廣川さん、次回までに私お聞きしたいことがあるものですから宿題といたら御無礼ですがけれども、今、承った話の中で例えば、校長としてずっと回って子供の顔を見て挨拶をすると、そうすると子供の様子は毎日違うとおっしゃいましたね。それで具体的にどういうふうに違っているかと、この子はいじめにあっているとか何とかということが、印象批判じゃなくて、具体的な根拠のあるいじめの現象を把握出来るか出来ないかということを次回、お聞きしたいのが一つですね。それから職員間の連携が大事だとおっしゃいましたけれど、どういうふうな連携を、連携というのは、例えば職員会とか学年会はしょっちゅうやってらっしゃいますよね、先生方は会がやたらと多くて会議ばかりやっているようですけれども、だからその会議の連携が出来ていないということになるのでしょうか。そこをもうちょっとお聞きしたいと思います。

それから先程の教師の人権感覚の問題が大事だとおっしゃいましたね。つまりこれは先程、宮尾委員の問題提起は、教師は厳し過ぎていけない。けれども、教師というのは大体厳し指導したいと思っているのですよ。いい教師は大体厳しいんです。けれどこの厳しいということと、いじめに近いような厳しさとどういうふうに区別するのか。或いは教師としてその辺はどういう心構えを持っていけばいいのか。廣川さんの長い経験の中からまた次回、ゆっくり聞かせていただければありがたいなということで、この3点についてまた次回お願いいたします。

廣川岩男委員：

分かりました。大事な宿題ありがとうございます。今日はこれで失礼します。

戸田座長：

はい、それではいかがでしょう、今のいじめと不登校から学校教育の問題点に入っていきたいわけですが、他に…

清水卓爾委員：

やっぱり、いじめ、不登校の問題については、確かに学校に大きな問題があると思うんですけど、それ以上にですね、やっぱり先程出ている親の問題だとか地域の問題をきちんと解決していかないと、学校だけでは対応出来ないということで、上田市も地域協議会というようなものが出来まして、そこで色々検討をするわけですが、出来れば地域会会議ですとか、小学校会議、しっかりと教育問題を捉えていかないと、学校だけでお願いしては駄目だというのが、最初の提案であったものですから、私は非常にいいことだと思ってこの会議に積極的に参加させていただいたわけです。

やっぱりかつては1年生から6年生、或いは中学3年生までが様々なお祭だとか遊びの中でいろいろなものを体験していったわけです。今はもう殆ど遊びがない。個々の中で家庭で塾に行ったり、或いは土

曜日になるとサッカーとか野球とかそういうところの組織化されたところで異年齢との交流が無いわけです。その辺を基本的にやっていかないと、やっぱり長野県が長寿の県だと言われているのは、私はやっぱりいじめも同じように、かつて佐久病院の若月院長さんが言われたように、未然防止とか予防医学、やっぱりそういう観点をきちっとしていかないとまずいと思います。私も3、4年前に川西地区で公民館の里山講座というところから地域の皆さん達がいかに子供達が自然に接しないかっていうことで2ヶ所、最終的には今3ヶ所になっておりますけれど、自然に接しながら地域の大人達と交流をする場をつくらうということで、ピオープを作ったり、山の中に盆花をつるとかです。色々そういうことで発展してきました。出来ればそのいじめの問題、或いは不登校の問題も保育園、幼稚園の時代から小学校、中学、地域の関わりを一つしっかりと捉えていきたい。そんなふうをお願い出来ればありがたい。

それから学校の問題ですけど。先程、宮尾さんが言われたように、是非、私達地域の人達がもっと関わられるシステムを作ってかなくちゃいけない。中々学校というのは、門戸が狭いというか敷居が高いということで4年ぐらい前ですか、教育委員会で学校サポーターというんですか、様々な中で学校を支援しているということでメンバーを登録したんです。殆どの方がお呼びがなかった。これだと正に絵に描いた餅、それからどうも絵に描いた餅が非常に多くて私も教育委員長の立場から非常にこんなことを言えないんですが、やはり具体的に動かなきゃ駄目です。そういうことを含めて、是非、先ず地域をどうするか。そして学校の中にどれだけ地域の人達、或いは公民館、或いは地域協議会の皆さん達も出来るだけ学校のことを考えて関わりをもっている。そういうことの中でいじめの問題が、不登校の問題が論じられていると思います。

ですから私の場合は先程確かに相談所を多く設けても元をたたなければいつまでたっても駄目だと思います。そういう観点で是非、地域の関わり、とりわけ一番問題になっているのは、一番問題の家庭がどこでも出てこないでしょう。この人達をどう包み込んでいながら、親達も含めていじめの動向の解釈をやっていくかっていうのを具体的に突っ込んでもう少し協議していきたいと思います。以上でございます。

戸田座長：

はい、ありがとうございました。今の話し地域が学校に十分な協力をよくしないっていう話しが出てくるのですけれども、一つだけ、これは清水さんに異をたてるわけではないですけれども、私は学校や教師に責任があると思うのは、例えばPTAの会則というのを私は今、興味をもって色々調べているのですけれども、PTAの会則を見ますと、学校教育に協力し支援するって書いてあるんですね。

つまり具体的に何をやっているかということをお考えいただくと良く分かるのですけれども、例えばプール当番をやって頂戴とか、交通整理をやって頂戴とか、その辺を掃除して頂戴という、早くいうと3K(キツイ・汚い・キケン)の下請け事業みたいなことをPTAにやらせていて、じゃあPTAがうちの学校で、もうちょっと国語なんかのカリキュラムをこういうふうにして頂戴とか、……算数の宿題を出して頂戴とか、「あの先生はおかしいから変えるわけにいかないの」なんて言えば「何を言っているんですか」って、それこそ校長に怒鳴られちゃって、「そんな学校教育の内容にあなた達に口を出させる気はない」と。これは学校の専権事項であって、あるいは教師の悩んでいることであってPTAが口を出すべきことではないと。

それである国レベルの会議でその辺のことを、全国的に活躍しているある方にお聞きして「どうでしたかと。全国的にPTAはそういう風潮がありますか」と、「いやそうですよ。不文律ですけど会則の中に書いてなくても、もう学校教育の教育内容に口を出さないというのはPTAの暗黙の了解ですよ」と。こういうふうにご言われました。そうするとですね、下請けの仕事、つまり3Kのような仕事ばかりさせて、学校教育の

中枢に関わることが出来なければ、保護者の方だってそんなのではやってられませんよという気になるんじゃないかなあということが大きな一つの問題だと思うんですね。

私も長年、学校サイドにいましたから、どちらかというところについて教師側にやや厳しめに自己反省を込めて申し上げるわけですが、そういうことが根本にあるものですから、よく「地域でつくる学校」だとか、最近いろんな新しいことをやりますけれども、それならば学校教育のそれこそ中枢に関わることを地域の住民や保護者に何でさせないんだと、このように私は思います。私の一委員としての意見でございます。

さて、これに関連した、或いは関連したことでなくても結構ですけど、宮坂さんお手を挙げていただいたんですね。どうぞ。

宮坂公子委員：

いじめとか不登校、いじめた後、不登校になる場合、それからいじめがなくても不登校になる場合、色々あると思うんですけども、内的な要因と外的な要因と、こういうふうに分けられるかなあ、不登校についてですけども、外的な要因ということになりますと、やっぱりいじめられるとか、それからいろんな場所での人間関係が上手くいかないというようなことがあると思います。

こういう子をどのようにして解決していったらいいのかってことは、これはそれぞれの原因によって違ってくると思うんですけど、私は先ず学校で出来ること、クラスで出来ることは、担任の先程人権感覚というように言われましたけれど、やっぱりどんな子供の目でもみんな、光るものを持っているので、この先生は何をやっても認めてもらえる何をやってもではないけれど、どの子も認めてもらえるというそういう担任であって欲しいなと思います。

本当にそんな甘い言葉なんて言うかもしれないけれども、子供にしてみれば勉強はちょっと駄目けれども、掃除は一生懸命やっている。それを担任が認めて「お前は掃除を一生懸命やっている。その一生懸命さというのは素晴らしいなあ」いろんな場面で一人ひとりの子供達をそうやって認めてあげるといって、それが大事じゃないかなあ。

それからまだ色々ありますけれど、内的な要因としましては、やっぱり中々言えないけれど、家庭ということがあるのかな。子供にすれば一番安心出来る場所が家庭である。そこがちょっと居ずらくなるというようなこと。そういうようなところをやっぱり私達、私達というか担任が見て、そしてどのようにそれを進めていくかっていうことが大事じゃないのかな。

最近、色々家庭内の暴力というよりも殺人がありますけれど、そういうのを新聞を読むたびに、もしかしたらこうじゃなかったのかなあと思うと、そのようなことが次の日というか報道されています。あんまり期待されているということも、又、子供にしては辛いこと。いい子になっているということも、いつまでもいい子ではられない。

そういうような内的なものも私達が見ていかなければいけないんじゃないのかなあと思います。私は相談所で不登校の子供達としばらくやっています、あっこれ大事だったんだなあって思うのは、やっぱり一人ひとりを認めてあげること、一人ひとりの話をよく聞いてあげるといって、これは大人の社会も同じだと思うんですね。職員の間でもこれから自分は会議に行かなければならないってというような時に、「ちょっと話を聞いてください」と言われてきて、「それは後でね」と言っている間に忘れてしまう。そうじゃなくて、やっぱり忙しいけれども、忙しい顔をしないで、出来る限り聞いてあげるといって。そういう先ず、その人の立場に立って話を聞いてあげる。その子の立場に立って話を聞いてあげる。そういうことが大事かなって思うように思いました。

だけど、現実、学校の中を見ますと、時間がないということがあるんですね。ゆとりの時間といっても、それはゆとりではなくなってしまうたり、それから1週間に一度は相談というか話し合いの日をつくらうっていつつくっていても、40人、30数名の子供達と話せるわけでもない。そうするといつそういう時間を確保するか。それは又、教師の器量ということになるとは思うんですけども、やっぱり一人ひとりを自分の腕の中に抱え込むようなつもりで話を聞いてあげて、認めてあげることから出発するのかなあっていうように思います。

戸田座長：

是非、まだ発言をされていない.....

佐藤智恵子委員：

平成17年度に上田市が不登校ゼロ宣言っていうのを、皆さんご存じだと思いますけれどされました。あの時に丁度私はPTAの常任ということで出ておりましたので、そのゼロ宣言という子供をゼロという数字で扱ったということにすごくショックと、それから保護者の間ではすごく反響があったわけです。言葉のやりとりをするわけではなくて、それだけに上田市は不登校が多いということで、すごく緊急課題になっていると、市長さんや教育委員会の方では、何とか不登校無くすんだという理念という意気込みでそれをゼロ宣言という言葉に例えたというご説明でありました。私ども親はやはりゼロという言葉にショックを受けましたし、実際に不登校の子をもっている子供の家庭とか親はかなりのショックを受けたわけです。自分達だけが切り離されてしまったような感覚を得たわけです。

そうなりますと、いじめから不登校になる場合が勿論多いと思うんですけど、やはりその原因というものは一つに断定出来ないと思いますし、いろんな要素が絡み合って、そのいじめから不登校にいつてしまうというのがあります。先程、廣川先生もおっしゃったように、いじめてる本人がどうするか。どこまで子供達同士がふざけっこをしていて、本人同士はふざけっこをしている、だけれども、その時にその子の心情がとてショックなことがあったり、気持ちが落ち込んでいたらそれをいじめと受け取るだろう。だけれども、そうじゃなくて元気な時には同じことをしていても本人がいじめと受け取らなければ、それはふざけっこになる。その微妙なところが子供達同士もすごく今敏感になって、去年の暮れもいじめによる自殺というものが物凄くマスコミに報道された時に、もう「いじめ」という言葉に敏感になって子供達も学校現場でも先生方もちょっとふざけっこしていても「いじめ」ではないかという風潮になってしまった。そうすると子供同士の関わり合い、喧嘩したり、仲直りしたり、いろんなふうに絡み合っていくものがもう一歩引いてしまって、これをやればいじめになっちゃうかなって、人が見ればいじめと思うかもしれない。というようなことが今現場にも起こっている。これが本当の現実でございます。

それと不登校、例えば中学でも、中1ギャップといって小学校から中学に入った時に、どっと不登校が出るんですね。そこで環境が変わったり、いろんな新しい環境に対応出来ない子供達がいる。その時にクラスの中に5人なり何人なりの不登校がいた場合に、それはもうその子たちの問題ではなく、クラス全員の生徒達が真剣にどうしてあの子は出てこれないのかということをし合って、学校全体の問題としていかなければいけない。その親達も、先程も親の問題も結構出るとは思いますが、親達の認識としても、うちの子は不登校だって泣いたら、うちの子には関係ない問題だわっじゃなくて、うちの子はいつ不登校の原因をつくって、そのお友達に心の傷になるような言葉を言っているかもしれないし、いつ、うちの子だって不登校になるかもしれないってことを考えた時に、これは人ごとではなく、親は自分と子供の問題として、そ

の不登校、いじめのことに對して積極的に関わって問題の現実をみることと、どうしたらいいか解決策と一緒に考えて考えなければいけないと思います。やはり、不登校とかいじめだけじゃなく、それは現実の問題として皆と一緒に考えていく問題という認識を皆の共通意識として皆がもつということも大事でありますし、やはり小学校に行く前の先程宮坂先生から家庭のお話がありましたけれども、家庭における幼稚園や保育園行っている段階において、学校に行く段階前においてそういう基礎の部分が、やはり原因がここにあるのではないかと。

それと、今のこの日本の豊かさ、ゲーム、ビデオ、それからいろんなものにメールとかそういうネット状態の中に入って今、浸されている子供達に、その現実の社会とその子供達と社会人の関係、その分をきちんと見極めないとしたら学校現場の中にいじめが起こっているだけじゃなくて、大人の社会にもいじめがあるわけで、そういう大人の姿もやはり子供達は見ているわけで、そういうことを含めた中でいじめとか、不登校を捉えていかないと、学校だけで起きている問題ではないと思うんです。その原因というのは、家庭にもあるし、社会にもあるし、だからそのところを皆で見極めて、もっと生れた時から学校に行くまでの間、そこはやはり家庭というのが一番基本になるところだと思うんですけれども、その家庭をどうしたら今、いい家庭教育が出来るか。家庭の教育力が低下されているといわれていますけれども、今、お母さん達もどうやって子供を育てていいか分からない状態であります。そのお母さん達だって、テレビやそういうものに浸って育ててきたお母さん達なので、そういうところが今、分かってない。

ある保育園で子供を預った時に、ずっと元気がなくて、具合悪そうにしている。保育士はどうしたんだろうと色々原因を調べましたら、朝ごはんを食べてなかった。ああ、これでやっと原因が分かって給食を食べたら、すごく元気になって活動していたと。お母さんに迎えに来た時に「朝飯は食べさせていないんですか」と聞いて聞いた時に「えっ、朝飯食べさせるんですか。私は食べたことはありません。コーヒー一杯だけです。」っていうような淡々なお母さんに「朝飯は食べさせるんですよ」と言っても、実際の感覚として自分はそれで育ててきていなければ分からない。だから、そういう感覚で育てている人達が親になっているので、そこらへんから大人のあるべき姿もきちんと捉えていかないと、今の子供だけの現状だけではない部分も含めて考えていかなければいけないのかなあとと思います。

戸田座長：

ありがとうございました。

中村和幸委員：

大人社会という点では一つ言いたいんですけれど、マスコミがお笑い関係で人を傷付けたりしながら、しかもそれを笑ってしまうというのがかなり最近多いので、そういうことでは子どもたちに影響あるなというふうの一つ思っています。

それから教師の言動がいじめを誘発しているっていう。それは言語道断の判断ですけれども、あるいはもっと深刻じゃないかなあと、話しを聞いた時に私は思いました。その先生は勿論、人権感覚もあるし、素晴らしい先生なんだけど、一生懸命指導すると、指導に反している子に対して注意をすると、そのことがいじめの原因になる可能性があるっていうのは最近の視点ではないかなと。それは凄く重く受けとめていて、私なりにどう発信すればいいか、あるいはこの問題について、どう学校現場で話し合ったのかすごく興味を持っています。

何故、そうなるかっていうと、今、子供達はすごいストレスにさらされているなっていうのは感じています。

十何年前ですかねえ、初めて中学校へ行きましたけれども、中学1年で中間テストか期末テストがあるんですけども、その前の日に眠れないという子が2人いたんですよ。私も中学校時代、ずっと昔ですけども、高校入試の前に総合テストでちょっと眠れなかったなあという覚えがあるんですが、それがもう中学1年から、という子たちがいて、やっぱりその一人は不登校になりましたし、もう一人もちょっと学校に来れないような状態になっていたりしたんですけども、それから小学校でもやたらと勝手にボールを蹴ったりするので、「どうしてそんなに勝手に蹴るの」って言ったら、無意識のうちに蹴っちゃうと、やはりストレスの捌け口になっているんだなと。

振り帰った時に私もこういうクラスにしたい、こう指導したいというのをあまりにもそればかりやり過ぎるとそうなっちゃうんだなと。先程、宮坂委員さんが言いました。その子の良さを伸ばしていくということは、うんとこれから私達に求められているのではないかなというふうに思いました。

戸田座長：

ありがとうございました。齊藤さんの方から。

齊藤忠彦委員：

今、ストレスという話が出たので、それと関連してお話しします。子供たちはストレスが非常に多いと思います。先生たちもストレスが溜まって、学校全体としてもストレスが溜まっていると思います。そういう中で先程、荒井さんから、日本の社会において子が親を殺したり、親が子を殺したり、という有り得ないというお話がありました。そして、福井さんからアメリカの小学校の面白い小学校生活というお話がありました。学校というのはもっと楽しいというのかな、魅力的なものをもっていると思うのです。子供にとって楽しい学校、授業が分からなければ楽しくないかもしれません。

ここは上田市の教育行政を考えていく会でありますので、是非、上田市のそれぞれの学校で何か特徴、言葉でいうのは簡単ですが、何か楽しい、魅力的なものをそれぞれの学校で発信していくことができないかどうか。後は先程、宮坂さんからもいじめに対して、予防とか対応という段階別にお話しをいただいたんですが、予防というところが大切ではないのかなと思うんです。そういう意味でも魅力的な学校づくりということを考えていったらいいんじゃないかなと思います。

もう一つは、先生たちもストレスで大変な状況になっているんですが、外部からのカウンセラーを配置することも非常に大事だと思うし、子供達が外に相談をしに行くことも大事だと思うんですが、やはりその集団にいるのは先生、担任の先生とか、その集団の中にはいないとわからないということはすごく多いと思います。先生自身の人権感覚という話がありましたが、先生自身の力を高められるような方策、これが非常に大事じゃないかなと思うんです。私は大学に勤務しているんですが、丁度今、関連する附属中学校で音楽の先生がお休みになっており、この間、3ヶ月ぐらい吹奏楽部の部活指導だけ朝7時に行っています。それから大学に勤務しているんですが、外部から指導するという立場ですが、やはり私は正顧問じゃないんで、その集団の中に踏み込めるところと、踏み込めないところがあることを実感しています。やはり集団の中にいる先生、担任の先生は特にそうですが、やはりいい先生であって欲しいということをしごく思います。集団の中にいる先生は、例えば、いじめがあるないについてわかっているはずだと思うんですね。後は、いじめは絶対に許さないという、不登校も出来ればないようにしなければいけないという強い信念をもってほしいです。この会で、先生自身の質を高める方策、その具体的なものを何か考えられたらいいなと思います。簡単に感じたことを述べました。以上です。

戸田座長：

それでは未だ福井さんにご意見をいただいて、あっ日比さんにちょっとお願いします。

日比英子委員：

いじめというと本当にいじめって聞いただけで悲しい気持ちになるんですけど、子供対子供のいじめっていうのと、それから教師から一方的に子供に対してのいじめっていうのがあると思うんですけど、私も子育てをいたしまして、教師から一方的ないじめを受けた子供をもつ親の一人です。上田市におきまして、教員評価というものがもっと厳しくなされていいんじゃないかと思うんですよ。

人格的におかしいと思われる教師が一杯いるということは現実に見ております。それに対して何ら措置をされてないということ、又、言える状況じゃなかったこと。言える環境でも無かったこと。それがずっと尾を引いて子供達、うちの子供でもそうです。今、現在、一時引きこもりにもなりました。でも今、ちゃんとやっておりますけれど、そういう子供が本当に一杯いることを私は見ております。ですから、私が今、望んでいことは子供対子供のいじめは勿論のこと、教員からのいじめというのももう少し見ていただきたいということなのです。それを切にお願いしたいと思います。

戸田座長：

ありがとうございました。それじゃあ、ちょっとお休みをとりたいと思います。その前に福井さんの方からこれこそ社会の問題から家庭の問題から色々出てきましたけれども、日比さん、或いは斎藤さんの方から少し具体的な提案、或いは制度設計に関わるような話しが一杯ありましたので、そういうことも踏まえて5分ぐらいお話しいただいて、その後、ティータイムとかトイレタイムにして、その間に皆で提案を考えて、そして4時5分ぐらいから続きをやりますので恐縮ですが5、6分で。

福井秀夫委員：

大変皆さんからのご意見、勉強になりました。さっきもちょっとこの話題が出ていましたけれど、私の経験したミネソタの田舎町の小学校のことで、若干補足をさせていただきます。先生のスタンスは、小学校の中学年とか低学年でしたが、基本的に非常にフレンドリーなのですね。先生達が子供に接するというのが非常に慈愛に満ちていて、勉強についても、勿論、分からない子に手を差し伸べる、丁寧に教えるということについては非常に熱心ですけれども、それを評価して競らせたり、鞭をうったりという姿勢が殆どない。基本的には楽しく学ばせるということに関して徹底的なトレーニングを受けているという印象があります。

反面、非常に感銘を受けましたのは、子供同士ですから、喧嘩をしたり、たまには手を出したり、蹴飛ばしたりする子がいる。そういうことがあると、後で親が子供から聞いても縮み上がるぐらい手厳しく叱られる暴力、人種差別的な発言に関しては、徹底的な指導がある。もう一つ、これにメリハリがあって面白かったのは、例えば、日本だと気をつけとか、休めとか、前に進めってありますよね、あれが一切ないのです。アメリカは校長先生の話とか担任の先生の話はありますけれども、あぐらをかいて座っていたり、あるいは、寝ころんで聞いていたりする子が一杯いて、むしろそれが普通なのですね。皆で整列させて、ありがたい話を拝聴させていただくという姿勢を一切とらせることがない。

これは学校の問題と文化の問題もあるのでどちらがいいと一概には言えないのですが、私はやはり一事が万事を象徴をしているというふうに思いました。先生はやはり親や市民から雇われているサービスの

提供者だということを非常に強く自覚しておられて、またそれを信頼して親の方も学校の行事にも非常に協力する。例えば、日本じゃあんまりありませんけれども、遠足などに親もたくさんついてくるんですね。ボランティア募集で行きのバスの中のお歌を歌う相手をするとか、或いは現地で子供の班わけをして、引率して公園を歩きまわる。私もやったことがあるのですけれど、非常に保護者と学校の関係もフレンドリーになるのです。やっちゃいけないことに関してはもの凄く厳しい。だけど、一言で言うと他人に迷惑をかけることに関してはどうぞ自分の責任でやってくださいと、いうところがあるわけです。

朝御飯の問題も出ていましたけれど、なんと朝御飯も昼御飯も給食があるのです。朝御飯は見ていると家で食べてくる子、コーンフレークとか食べてくる子もいるのですが、行ってから朝食をそこで食べる子も多い。ピザだのトーストだの結構、ちゃんと考えたものが用意される。多分そうですね半分から3分の2ぐらいの子供達は学校に着いてからカフェテリアに行って朝御飯を食べている。これだったら親は楽でいいなあと思いました。逆に言えばアメリカだって働いているお母さんは非常に多いので、そういう人に無理を強いることは言わないのです。朝御飯を用意するのは可哀相でしょっていうことで、学校の方でサービスを提供している。これはむしろ自然なことだと思いました。只、うちの子供は米が食べたいというので、面倒だけれども家でご飯を炊いて食べさせていましたが、アメリカ式の食事であれば非常に便利な仕組みだと思いました。

それからもう一つ経験に基づいたことで申し上げますと、さっきも話題が出ましたけれど、教員なり学校のあり方に関する評価ということでは、実は大学がかなり先進地帯です。現に私の所属する大学でも10年前に創設された新しい国立大学なのですが、設立以来、研究業績については開示義務があります。どの論文を書いたとか、どの講演会に行ったとか、あるいはこの上田市の教育に関する委員会に参加したとかということについて、全部公表しなければいけない。さらに、研究業績に加えて教育業績ですね。どの科目を教えて、その科目ではどういう評価があったかっていうことも、これも学科長だとか学長だとかが当然に知りうる立場にあるのです。5段階評価です。全部で10数項目がありますけれど、教員の授業は分かりやすかったですかとか、あらかじめ示されたシラバス通り進行しましたかとか、或いは学生に対してフェアに接しましたかかっていうようなことに関して、5段階で我々は徹底的に評価されます。私が責任者の知的財産プログラムでは、年に2回、全教員の評価を全学生からしてもらっています。

これが極めてあてになるんですよ。殆ど講義の巧拙振りが手にとるように分かる。私自身のこともそうですし、同僚達の評価についても、例えば、若手で慣れてないなあといえばそのように出るし、又、評価が恣意的だったとみなされた教員については、それについて極めて冷静でだけど、かなり手厳しい評価が出てくる。これを本人とディレクターに開示する仕組みになっておりますので、やはり受け取った教員はショックをうけたりするのですけれど、直すように務めるんですね。やはり学生から評価を受けてそれで教育が成功するということは教師にとっては非常に教師冥利につけるわけで、多少耳にいたいものがあったら皆一生懸命改善努力をします。これも実感としても申し上げられますけど劇的な効果を得る、というふうに私は確信をしております。

しかるに、私自身の子供達も経験しましたが、アメリカでは評価の仕組みがありました。でも日本の公立小学校や私立の中学、高校では、教師や学校の授業についての評価というのがほとんど見られないのですよ。これもやはり彼我の格差ということでも感じますし、私自身が関わっている大学業界でも、小、中、高校業界でも、教員には一般にあまり評価されることを好んでいないという文化があるなと強く感じます。

後は一般論で感想めいたことなのですが、確かにいじめとか不登校の問題について、いろんな角度からの議論が可能だと思うのですが、あまり文明論的、文化論的 或いは家庭教育全般みたいな大きくて

高邁な話しは、やや抽象的で長期的課題すぎて、恐らくこの委員会の役割、ミッションから外れると思うのですね。これは大事ですけれども、それはさておき、差し当たり教育現場で出来ることは何かということに出来るだけ議論を集約させていった方が、皆さんも忙しい時間に多大な労力を掛けていられているわけですから、費用対効果でも意義があるのじゃないかと思う。差し当たり現場で出来ることは何だろうかということです。勿論、他にも一杯ありますけれど、それを全部この委員会なり、或いは市長の陣頭指揮のもとで市内だけで解決するという事は難しい。そうすると、学校現場なり、教育現場で出来ることの一番確信的な部分は、これも何人かの委員がおっしゃいましたけれど、いじめや不登校を起きた原因が学校の中にある場合にはその原因を完全に除却することだ、ということに尽きると思うのです。

勿論、個人的な家庭の問題で起きた不登校ですとか、或いは家庭でなくとも何らかの本人自身の原因によるような不登校というのものもあるでしょうけど、それは学校ではどうしようもないわけですね。学校外のことにもっと責任をもつことは強いるのはまずいのではないかと。だけど友達の心ない言動で傷ついたりとか、或いは物を盗られたとか、脅されたとか、先生の一種の差別的な取り扱いで傷ついたりなど、このようなことがもし分かったとするならば、逆に言えば分からないといけない話ですが、原因を徹底的に探求をしてその原因が学校の中、教室の中にあるということが分かった時には、何が何でもそれを取り除くということに対して、どれだけ教育現場で力を出し、責任を果たすことが出来るのか。そこにある程度議論を収斂させることができれば効果的だと思います。

学校内で起きたことは、基本的には学校に全責任があると考えないとおかしいと思うんです。勿論、ナイフを持ってきて刺し殺したとかというような話しになると刑事の問題になりますが、学校運営の中でクラスの行事なり、或いは勉強の合間なりというようなことで起きたことというのは、やはり学校が子供を預かっている以上、基本的には全責任を負うと考えなければならない。

学校も担任の先生、校長先生、いろんな立場の方がいらっしゃいますが、どうやって原因を取り除くかという手段については、非常に選択肢が多いし、一定程度現場の裁量によることになると思うのです。やはりさっきも話題が出ていましたけれど、単にいじめた子をやっつけるだけでは話しにならないということもあるでしょうから、いろんな形で後で副作用が出ないように上手く治めるということには裁量があると思うのですが、大事なことは、要するに結果がよくならないといけないということですね。誰かいじめた子がいじめなくなる。いじめた子がいじめたからといって、又、誰かから連鎖的にいじめられるなどということが無くなるように、基本的にはいじめや不登校の原因になっているような行為が再発しないようにとにかく結果だけは確保して欲しい、というのが普通の親の普通の願いだと思うんです。その為に何をやるかということなのですけれども、これはいろんなやり方があるわけですから、やはりまずはとにかく行為をやめさせるということが最優先となるべきでしょう。

いじめとか暴言や暴力があった場合にはその行為をとにかく直に辞めさせる。しかも即時に辞めさせるということが必要ですし、それに伴って必要な協力があれば、例えば親御さんで自分の子供は別に先生に可愛がられているっていう場合には、あまりピンとこないって親御さんがいらっしゃるというのは、私もその通りだと思うのですが、だからといって父兄の皆さんが集まって、集団で討議をしてもまったく意味がないと思うんです。いじめられている子はその子だけなのですから、他の子供や親にとってみれば私に関係がないという、非常に冷たい言い方ですが、そういう反論があるのは致し方ないところです。やはり、何百人の中で1人や2人がいじめられたとしても、それはその子やその親に関わる固有な人権侵害なわけですから、どんな権利でも侵害されたら、学校が責任をもって子どもを預かっている以上、侵害行為は完全に除去しちゃうといけない。他の親がそういうことに興味がないからといって、学校が躊躇しては

いけないといことは非常に重要なポイントと思うわけです。そういう意味で親の多数決に頼るといのは、あまり効果的ではないし、かえって人権無視の考え方です。

それからもう一つ、地域の問題というのが出ました。私も地域が学校と関わるといのは大変重要なことで、出来るだけ学校は地域に開かれていた方がいいと思いますが、一方、いじめや不登校の問題になりますと、それはやはり非常に個々のデリケートな問題なのですね。誰かさんとこの子がいじめられているからといって地域の町内会長が乗り出して、プライバシーに関わることで、全部聞きだして対処するなどということは、これは現実的でもないし、やるべきでもないんですね。それは、預かっている担任や校長先生、或いは教育行政に責任を持つ教育委員会こそが、いじめられている子供もいじめている子供も傷つけないようにして、迅速にかつ的確に処理しなければいけない。そこはむしろ地域というよりは、学校の方に色々な責任があるという考え方が分かりやすいという印象をもちました。こういうふうにする時に、やはり先生や校長先生がどういうふうに関わりや行動に向き合うかっていうところですが、これは色々なルートがあると思うのです。しかし、結果さえ出ればいい観点からいうと、要は被害者の満足度を高めて人権を守る解決が出来るかどうか、だと思っんです。

そのような解決が出来るかどうかという時、私は最大のポイントは日比さんもおっしゃいましたけど、やっぱり保護者とか生徒から、その先生や校長先生の問題の解決策が、学校の運営者として適切であったかどうか、という評価は、ちゃんと、例えば、人事だとか、或いは先生の配置、例えばどういう先生に担任を持って欲しいかという要望を処理する時の重要な判断要素にするということがあって初めて、先生も仕事に緊張感をもつ。

学級の向上についてもそういうことがいえると思うんですけれども、やはり大学はもちろん、或いは諸外国でイギリス、オランダなんかでは、小学校低学年でも低学年の子ども自身に、先生がちゃんと問題をフェアに処理してくれるかどうか、適切に教えてくれるかなどのアンケートを定期的に必ずとるわけです。日本でもそういうふうにして、いじめの処理や、不登校の処理について、ちゃんと当事者が納得出来るようなかたちでなされたか、ということを経験して、それがきちんと人事処遇に反映されるという循環の仕組みがあって初めて緊張感が生じる。人間って弱いものですから、ある程度緊迫感がないと本当にサービスに徹して親身にはなりにくいと思う。これは我々大学教員も全くそうだと思います。

さっき申し上げたように、大学でもきちんとした評価システムがないところでは、墮落しきった大学教員は世の中に沢山いますから、そうじゃないようにするには、他の人から、特に消費者である子供達から常に見られている。親に常から見られているという状況を作り出すしかない。きちんと仕事をする教員にとって、決してそんなに悪い話ではない。健全な緊張をもたらすのではないかという印象を持っています。

戸田座長：

ありがとうございました。今までの色々出たご意見のまとめをちょっとしていただいたような……それをちょっと踏まえて4時10分まで休みをとって、それからその後また5時少し前まで今の話しをもうちょっと敷衍して発展させていきたいと思っんです。よろしくお願ひいたします。

休憩

戸田座長：

それでは汽車の時間があると思っんですので、一番遠い方は、じゃあ5時5分前までやりますね。それで

最後に次回のスケジュールを。

事務局(小林政策企画局長):

事務局でちょっと打合せをさせていただきたいこともありますんで、次回の会員の方とか説明もありますので10分前頃をお願いしたいと思います。

戸田座長:

4時50分まで続けたいと思います。それでは大変いいかなり本音に迫るご意見を皆さんそれぞれから頂戴しまして、聞いてらっしゃる傍聴の方やメディアの方に感想をお聞きしたら、大変面白いって言ってくださいまして、これは大事なことで面白くない議論は議論じゃないってようなもので、大変面白い。先程から学校にはユーモアが必要だといった話があっちこっちから出ているのですけれど正にそうです。学校や教育についての会議は何かしゃっちょこぼって江戸幕府の大名の会議みたいなものが多いですが、こんな調子でひとつユーモラスをお願いしたいと思います。

それで最後に福井さんの方からかなり集約、整理してお話しが出ましたけれど、いじめとか不登校って切り口でちょっと現状についてご意見を頂戴したわけですが、ここの副座長の荒井さんは、自ら不登校の受け皿をつくって実践しておられるという貴重な経験しておられる方であるわけです。それから後、学校教育の中で何が出来るかということを含めて、かなり話しも拡散しましたが、先程の福井さんの話しにもございましたように、学校教育という土俵の中で、ひとつ考えて頂きたいと思います。そういう意味で今度は議題の2の(1)、(2)に学校経営のあり方、教員評価制度のあり方、学校選択制度のあり方、教育予算のあり方も含めて今の問題を敷衍し発展させていただきたい。

もう既に斎藤さんそれから日比さんから教員をちゃんと評価してもらわなきゃ困ると。最後に福井さんの方からもきちんと学校が結果を出せるように、そしてそのことについては、保護者、児童、生徒から評価してもらうことが必要だと。そして教員にとって一番嬉しいのは、教え子にいい先生だと言われることが一番嬉しいわけでございます。又、その裏返しには駄目な先生だといわれるとガクッとするわけですが、そういうものがきちっとあがってこないということは、私も40何年教壇に立ってさびしいですね。ですから殆ど自己愛の世界に。それは素晴らしい教師だって自分にいい聞かせないと中々教壇に立てないところがあるわけです。中村さんとか斎藤さんとか当時私の教壇の下の方にいた人がいるのでヤバイのですけれど、そういう反省をしながら申し上げました。

そういうわけで、いい意味でも悪い意味でも教え子から、或いはその背後にいる保護者から何らかのかたちで評価をして欲しい。本当は無意識のうちに評価してもらいたいと思っている。校長に評価してもらっても嬉しくないのですよ。私も校長の時に「素晴らしい先生だね」なんて、お世辞を言っている。「素晴らしいってどうして分かるの」と言われる。「私に対して愛想がいいから素晴らしいんだ」ってそんなようなものですよ。だって教室でどういう授業をしているか、児童、生徒にどう接しているか全然みえないわけですから校長には、ですから校長が「あんた、いい教師だね」とか「あんた駄目だね」って言ったって、これはあんまり意味がない。ただ校務でどういうことをやっているか、例えば生活指導の係だとか生徒会の係だとか色々なことでどういう働きをしているかということは校長は分かります。しかし、教室の中の教育指導については校長には分からないですね。そういう意味ではそれは一番分かるのが教わっている児童、生徒とその背後にいる保護者ですから、それも入ってこない校長が一方的に評価する。最近の評価ってというのは校長の上司評価なんですよ。そうでしたね中村さん確か。上司評価と自己評価の組み合わせですね、

今。

中村和幸委員：

はい。

戸田座長：

あれじゃあちょっと困りますね。実際そうですよ。校長になるとね、校長にすり寄って来る者は何となくいい教師に見えるのですよ。ところが本当にいい教師の骨のあるのは、大体ちょっと斜に構えたり、口が悪いんですよ。それでつい「これは駄目だなあ」と思いがちだけど、本当はそういうのが生徒にも人気があるし、生徒のことを心配しているよい教師が結構多いですね。ですから、校長の評価はあまり当てにならないと、他ならぬ校長経験がある私が実感しております。すみませんちょっと私喋り過ぎて。それでは、先程3人の方々齋藤、日比、福井の3人の方でかなり問題提起していただいたところに更に敷衍していきたいと思います。それについて何かご意見があればお願いいたします。

宮尾秀子委員：

本当に日比さんのおっしゃる通りじゃないかなあって、私も日比さんの関係する教員の方の教え子を知っていますが、どう考えても犯罪だなというところまでいっている人も今、現在も教師をやっている長野県は何なんだろうと思います。

上田市の教育委員会に言っても駄目、長野県教育委員会に言っても駄目、またその教師が担任を持っている。そういう教師すら辞めさせることが出来ないっていうのは、本当に子供がどう思っているか、保護者がどう思っているか、というのを完璧に掴んでいないからじゃないかなあってそんなふうに思います。

子供がどう感じているか、さっき人権感覚の研修とかって先生達、廣川さんもおっしゃっていましたが、評価するのは子供ですよ。その先生の人権感覚が確かかどうかは、自分がいくらいい人権感覚だなあと感じていたって、子どもの人権感覚に優れて安心出来る先生だって思っているかどうかを子供に聞かなければ分からないじゃないですか。それを子供に聞くということは今はないですよ。だから、それが一番当てになる意見なので、特に一番大事なのは教員評価でそれを人事まで反映していかないといい先生も悪い先生も同じみたいな扱いになっていくんじゃないかなあとということと、さっき戸田さんの方でおっしゃっていましたが、校長先生は意外と担任が何をしているか知らないっていうことでは、私がCAPで学校に行った時に、校長先生がこう言ったんです。「実は校長というのはよく見えないんですよ。授業でクラスで何が起きているか。」それで担任が小学校の場合、唯我独尊、天皇陛下のような存在になるので、「実は僕も何が起きているか分からないので、宮尾さんどうですか、クラスの様子はどうなんでしょうかね。大丈夫なんでしょうか」っていうふうに聞かれたことがあるんですね。「なので第三者に入って見てもらいたい。そこで何が起きているか。実際に見てもらって、校長はそれを聞かなければ本当に児童、子供達が大変なことになるんじゃないかと僕は思っています」っていう校長先生の声を聞きましたので、やっぱり子供がどう思っているか、保護者がどう感じているかが大切。

子供がやっぱり言える相手は親で、やっと言えるのが親っていう場合があるので、その親からの意見が反映される評価、そういった評価も担任に出すのではなくて第三者機関、又は教育委員会に直に教員評価を送られるようなシステムじゃないと、「おい俺評価しろよ」って怒鳴られてやっぱり先生は権力がありますから、その先生に出すのに、先生怖いとか先生に嫌われるとか怒られるとか思うと書けないんじゃない

かなあ子供は、と思います。保護者も子どもを人質をとられているような気持ちで、学校におくり出している人も多いので、その先生に変なことを書いたらまたいじめられるって思っちゃうとやっぱり書けないかなあと、そんなふうに思うので、第三者機関を通す教員評価の必要があるかなあって思います。

戸田座長：

どうでしょう。宮坂さんや或いは宮澤さん、色々教師の経験もおありだし、校長さんの経験もおありだし、宮澤さんは先程、御意見をお聞きしてないような気がするけれど是非。

宮澤怜子委員：

難しく、皆さん方のお話を聞く時に、親になってみたり、子供になってみたり、教師になってみたり、いろんなところに自分を全てのところに置き換えて聞いていました。全て納得する面と全て「いやーそれじゃないなあ」って思うところとございましたけれど、今の学校の教員評価ひとつにしても自分の子がとても喜んで学校に行く。担任をととても信頼している。それだと割合に家庭の中で見る目というのは柔らかく柔軟になる。子供がちょっと「先生嫌なんだ」っていうと、今度は先生の悪い面がどんどん親はそこだけを見ていってしまう。自分の子供を見る時と同じなんですけれど、どうしても悪い面はよく見える。でも良い面は隠れてしまうことが多いわけですね。

だから教員評価という面でも親が先生を見る目と教室の中で子供が先生を見る目とやっぱり若干違ってくのが当たり前なんですけれど、どっちをどうとらえるのか、評価するのはいいんですけども、その先生が駄目という印を付けられたその先生は「努力すれば何とかなる」ということを子供に言いながら「自分も努力すれば何とかなる」って言って頑張れるように今までできているといいんですけども、そこでくじけていってしまう。又、どこかへ転勤させられるっていう、そういう思いがあるとどうしても校長の目、親の目、それを気にし始めるんじゃないかなあとというのがちょっと心配を感じます。

親が心配なく子供を学校に送り出して楽しい学校生活を送れるということは、やっぱり親が先生を信頼しない限りその思いは子供に伝わらないんじゃないかと。親が帰ってきた子供に「あんた学校でまた先生に何か言われたの」って言えば、言われなくてもまた言われたような気になって子供はだんだん先生を信頼しなくなっていくんじゃないかなとそんな感じをする場面も見てきましたけれど、何とか学校全体がよくなるように、先生方が喜んで生徒と遊びながら信頼感をもっていけるようなそんな方向になっていける評価制度が出来ればいいんじゃないかなあと。ちょっとまとまりませんが、そんな感じを受けています。

戸田座長：

ニワトリと卵の話のような関係があると。つまり親や子供が教師を信頼するのが先か信頼に値する教師になることが先か、という問題があると思うんですね。その点を今ご指摘いただいたのではないかと。どっちかといえば、先ず親や子供が教師を信頼する方が先だという方に若干アクセントをおいてこられたという印象ですが、その点いかがですか。どうぞご意見を。

清水卓爾委員：

学校の先生の評価制度というのは、私も必要だと思います。学校の先生ばかり責めているわけじゃないですけど。教育委員会がどういう存在だということをちょっと考えていただきたいと思うんですけども。私も5年半やりましたけれども、教育委員会というのは、大体実権を握っているのは教育長ですよどこ

でも市町村はね。そうすると非常勤の教育委員というのは非常に辛い立場で、教育委員長を辞めた時も私は何て言ったかという、「正確なシュートを打とうかとする時に味方から手が出てくるから、今度は外からスリーポイントシュートを打ちたい」やっぱり評価制度というの、いじめも学校に言っても駄目、校長に言っても駄目、教育委員会など先生のOBの方が電話に出るわけで、後の判断は教育長でしょうがね、そこにやっぱり先程言った宮尾さんの第三者機関ということが大切だと思います。そういう判断がないと絵に書いた餅になる可能性があります。

是非、そういう面では戸田先生も学校の先生だけど、私はどちらかという報道関係の出身で、報道関係というのはですね、ちょっとまずいことをすると学校は箝口令という教育会は箝口令をひきます。ですから、よく私は例えにライオンに襲われたシマウマ集団だと外に蹴りあげるじゃないかと、そこをどうにかしないと評価制度も絵に書いた餅になるような気がしますので、その点を力を入れていかなければいけないと思います。

戸田座長：

教育委員長さんをされた清水さんですらそうですか、教育委員会を牛耳るのはだれ……要するに教育長が全て……ですか？

清水卓爾：

ほとんど市町村はそうですね。その中で教育委員、上田はあんまりそうでないのですけれども、極端なところに行くと義務教育の先生が5人のうち3人いるというような県もあります。後は名門の家の奥さんとか。非常に裕福な家の奥さんとか。私達はどちらかという違う感覚で教育委員会を見ていたんですけれど、やっぱり県もそうですね、全体的に壁が厚い感じがしますね。ベルリンの壁のような気がしました。

戸田座長：

これは先程申し上げましたけれど、4月以降にも大きな課題となりますので、是非、皆でベルリンの壁をうち破る14人のテロリストみたいな自爆しちゃうかもしれませんが、その時にたっぴりと議論させていただきましょう。はい、どうぞ。

宮坂公子委員：

教員の評価というのは、大事だと思いますけれど、とても難しいなあと思います。中にいる者同士でやるというのも、これもまた問題だし、生徒にやってもらう、やってもらうということも変ですけれども、それも中にはこういう教員もいますよね。生徒に言語をするというか、そうして調子よくやっていて、いい先生だと言われる人もいます。だけでもそれが本当に正しいかどうかということも難しいことですし、それでは第三者というと、第三のところはどういうふうにして見きわめるのか、これはとても難しいものというように思います。

そういう制度をつくって評価をされるという、教員が危機感を持って日夜励まなきゃいけないということはとても大事なことだと思います。じゃあ評価で悪かった人はどういうふうにするか、そのところはやっぱり考えておかなければ、「悪いものは悪い」じゃなくて、そういう人は差別になるのかもしれないけれど、やっぱりどういうかたちになるか、研修の場を多くつくるというか、そういう補導が必要なのかなと思いますし、それから今、話されている中でそうと思わないんですけれど、私達が気をつけなきゃいけないのは、今の社会をちょっと見ると、学校と親というのがどうもちょっと両方で不信感があるような感じがするんですね。

そうじゃなくて、やっぱり両方で歩みよってつくっていくという、そういう気持ちをまずは持たなければいけないんじゃないかなあというように思います。

先程の不登校のところに出てきましたけれど、いじめのところも出てきたんですけど、自分の子供はいじめられてないからいいんだという、もしそういう思いがあったとすれば、それはやっぱりいじめに属すると思うんです。私はこんな方法がまた必要じゃないかな。いじめられている子、不登校の親をクラスの親がどのようにやって見ていくか、ある不登校の親がこういうように話すんですね。「学級懇談会の通知はいただくんだけど、行っても誰もこうやって関わってもらえないから、だから行かない、だから学校のこともわからない、と言われるのを聞いてそういう親をどういうふうにしてクラスの保護者が関わっていくのか。そういうことも大事なことじゃないのかなというように思いました。以上です。

戸田座長：

今のお話しの途中で、評価制度をつくるぞっていうと危機感を持つから、そういう効果はあると。けどつくこと自体には私は賛成であると。というご主旨のご発言がありましたけど。

宮坂公子委員：

評価はねえ、どういふかたちになるか分からないけれども、私はあっていいと思います。あっていいけれども、それはそれ。そしてそういうものがあるということで、やっぱり危機感というちょっと言葉がおかしいですね。やっぱり自分で勉強しなければいけないという、いつもそういう制度があるうがなろうが常に子供達と親と三者でもって自分がどういうふうを受けとめられているか、どうやってやらなければならないことは考えていくのはやっぱり教師だと思います。

戸田座長：

現在、宮坂さんが辞められてからかな、上司評価と自己評価のあれは最近ですよ。今年試行ですよ。そのことを踏まえて、現実には上司評価だけになるわけですよ。その評価よりましな評価はあるかどうかという視点も組み込んでお考えいただきたいんですが、どうでしょう今の。はい。

佐藤智恵子委員：

教員評価と授業評価とは別ですよ。

戸田座長：

授業評価も教員評価の当然重要な要素になりますね。

佐藤智恵子委員：

今、ここで言われている教員評価というのは、授業評価だけじゃなくて、その先生全てを含めて、授業それから先生の人格を評価する、ということですよ。子どもが先生を丸ごと評価するということですよ。子供が先生をどう思っているか、親が担任としてその先生をどう思っているかっていうことを評価する。

戸田座長：

その先生をどう思っているかって、それは評価項目っていうのがありますけれど、授業がどうか、それが

ら生活指導がどうか、課外活動についてはどうかっていら、それが評価項目っていいいます。現在の評価項目の作り方も問題があるのです。かなり細かいんですよ。それはさておいて、そういうふうに関目別にやっけて全体を一括評価するということが目標になると思います。

佐藤智恵子委員：

先生は授業が一番子供達にどうやって分かりやすく教えてやるのかってというのが、先生の一番力量を發揮する場所だと思っけですよ。その何十人かいる生徒を分かる子と分からない子が出てきた場合に、どこに勿論分からない子を教えていってもらいたいというのは勿論あるんですけども、どこで子供達が見るか。その分かりやすい授業評価というのは、確かに先生に対する授業評価、学期ごとが終わることによっけ分かった子、分からない子、色々項目があるらしいですけども、そういうのをやり出しています。

それは先生が次の学期のステップするため、自分の授業の教え方がどうだということを決断するためには、それはかなり必要だと思っけ。自分が分かるように教えているつもりでも子供にとっては分かってなかったんだと気がつくにはそういうものがないと出来ないと思っけ。うちの中学でも授業評価はやってあります。先生を丸ごと評価するということになってくると、その先生に合う、合わない、人間性とかあって、子供達に判断基準が曖昧になってくるとは思っけ。

それで今、宮坂委員さんの方からもおっしゃったように、子供にすり寄ってくる先生、自分をPR するような先生も現われてくるでしょうし、そういう親にPR するような先生も現われてくるかもしれません。それが全てでそれを判断出来るというのは、とても難しいように思っけ。その授業評価というのをやはり大事だと思っけですけども、教員評価となった場合に、どこの基準でどうなるか、子供達に判断が出来るか、できないと思っけ。そこがポイントになってくるんじゃないかなあと思っけ。

戸田座長：

これは事実の問題ですけども、授業の満足度調査というのは、個別には今、始まったことではなくて、私が教員になった頃から勝手にやっていて、自分の授業がどうだったかっていうことを生徒に書いてもらう。最後の方は馬鹿馬鹿しくって辞めちゃったけれども、というのは生徒は遠慮して悪いことは書きませんから。とてもさっきの授業が良かったと大体そう書きます。お前さんの授業なんてとんでもない。聞くに値しない。なんて誰も書いてくれません。ですからむちゃくちゃな授業をやっていたってそんなこと書けませんから。

だからこれは満足度調査というのは、本当に文字通り「教師の自己満足調査」っていうようなもので、あんまり効果がないのだと。それから満足度調査と授業評価というのはちょっと違う性質のものだということふうに思っけ。ただ今中学でやっておられるのは、満足度調査に近い、その先生のところに出すんですね殆ど。

佐藤智恵子委員：

いいえ違っけ。先生に出すのではなく学校へ出します。

戸田座長：

無記名ですか？

佐藤智恵子委員：  
はい、無記名です。

戸田座長：  
どういうふうに使っておられるんでしょうかね。

佐藤智恵子委員：  
それは学校側に出し、その後多分その先生に届くと思いますけれども、無記名で……その中に色々、例えば授業がよく分かるだとか、質問の時間をとっているかとか、宿題がどうのこうのという項目がいっぱいあるようです。それで A、B、C、D、4 段階、それぞれの項目ごとに 4 段階で本人が記入します。

戸田座長：  
それはただの満足度調査よりいいですね。……

佐藤智恵子委員：  
授業評価と呼んでいるんですけど。

戸田座長：  
だからそういうようなものをきちんとした制度化にしようというのが、先程の清水さんのご意見だし、現在あるとすればそれをもっと委員の方に取り上げて、そういうタイプのものがあるということについては、佐藤さんは賛成なんですね。

佐藤智恵子委員：  
授業評価というのは賛成ですが、ただ先生を丸ごとだと好き嫌いとか、クラスの中に全員がその先生に合うとは限らないと思います。それから親がよく思っていないとやはり、家庭の中で何かにつけてその先生をよく言わないような言葉が出てくると子供はやっぱりそれを聞いているので、先生に対してよい感情を持たない、そうすると先生の行為が何かにつけて悪く取ります。

戸田座長：  
その場合、うちに持ち帰って親子で話し合っってそういう評価をするのじゃないですか。

佐藤智恵子委員：  
違います。今の段階は授業評価ですので、学期の最後の授業に子どもが自分で記入します。

戸田座長：  
今、高校生ならそういうことも、大学生ならむしろ。小中学生は親子で話し合っって評価していくと。もし評価をするとすれば、そういうようなかたちのほうがいいと思います。そうすると先程のいわゆる子供に迎合するとか、という問題はかなり変わってくると思う。子供に迎合をするような教師や自分の子供を駄目にするような教師を評価する親はいないと思うのですよ。やっぱりしっかりきちんとした教育指導をしてくださる

先生を評価しますから、子供は「あの先生、僕から見るととても甘いし、何でも言うこと聞いてくれる、受け入れてくれるから、あの先生は5だよ」なんて言って、親は「それはあんたのおかしいところをちゃんと注意してくれる？」って言ったら、「注意してくれないからいいんだよ」って言ったら、親の方は「悪い、駄目だ。それじゃあ3だ」とか、という話し合いをして当然やるべきことで、とくに義務教育の段階になるとそういうふうによれば、先程のように子供を駄目にする、子供に迎合したり子供の方にいい顔をして甘やかすような先生がいい評価を受けるのじゃないかという心配は、かなり変わってくるというふうには思いますけれど。

荒井副座長：

私は民間の教育団体なものですから、教員の評価というよりも学校評価ですね。私どもに公立の先生方から友達を含めて沢山のメールが届きます。例えば隣の席の先生が今日居なくなってしまって、その代わりに授業を皆でやらなければいけなくて、今日は疲れてとても大変だとか、精神的に参ってしまって、先生をやめる人が出たというようなことまで含めているような情報が流れてくるんです。

いつも私はメールの返事にこう書きます。「いいよなあ君達は。常に生徒は学校に来るし、生徒集めはしなくていい。私達は明日学校が潰れるかもしれない。生徒が来なくなるかもしれないそういう危機感のうで毎日いつ落ちるか分からない梁の上を歩いているような生活をしている。だからどんなことがあっても子供達のニーズに応えるようにしなければならない。どんなに夜遅くなっても家庭訪問はするんだ。そういうことが教育の原点になっている。学校運営のためにお金を集めたり、そういう無駄な動きをしなくて、俺達の持っているエネルギーを全部その子供達のために使えたらどんなにいいだろう。」と私はいやみ半分でメールを送ります。そうすると誰も反論してくる人はいません。

つまり学校が評価されなければ、私達は生きていけない、糧も得られないし、子供達に自分達の情熱も伝えることも出来ないわけです。そしたら当然学校評価は教員評価に繋がるわけですから、その教員評価は徹底してやろうと、1年契約で徹底してやろうとしているわけです。だから教員達も必死に仕事をします。今言ったようないろんな教師に迎合をする子供達もいないわけではないですが、子供達は鋭いです。特に不登校を経験したような子供たち、目の動や小さな言動で、「この教師はダメだ」と的確に判断をしますよ。親のだって同じです。ただ、客観的な立場で子どもたちの「自分に都合のいい判断」などは排除して、きちんと判断する必要があります。

第三者的な視点も含めて、いくつかの視点で教員評価をすること、つまり、学校の先生方がうかうかしていられない状況をつくるのが大事だと思います。そうすると、自分で研修に行ったりも含めて自己研鑽の道をつくるということになると思います。それは教員のレベルアップにもなるし、学校全体のレベルアップに繋がってくると思います。

戸田座長：

ありがとうございました。大変上手にまとめていただきまして、ちょっと時間が、もうそろそろ次回の日程などもありますので今回は以上でということで、次回に繋がるように、今、荒井さんの方からお話しがございましたように、佐藤さんからかなり踏み込んだ大事なご提言がございました。ですから教員評価のやり方の問題。ですからどういう項目でどういうふうにするのか、それを上司評価とどう組み合わせるのか。その上司評価を全くしないというわけには当然いかないわけですから、校長の評価が約100%になりつつ、中村さんそうなんですよね。現実には校長の評価が100%になるわけでしょう。自己評価と組み合わせても最終的には、

中村和幸委員：

話しが長くなるんだけど100%じゃないですね。

戸田座長：

ああそうですか。自己評価が若干入ってくる。他の要素は何かあるんですか。

中村和幸委員：

ちょっと話しが長くなるんだけど。

戸田座長：

それじゃねえ、次回お知らせください。資料ももしあれば持ってきていただいて。それでそういう県で始まろうとする評価とそれから今ここで議論している何らかのかたちで……保護者の意向を反映した教員評価というもの。それとを対比させて、今度は具体的に教員の評価のやり方を各委員の方々、お考えなって問題提起していただきたい。

それからその次に学校選択制とバウチャーの課題もございますので、これも荒井さんから学校選択の問題が出ましたから、学校評価ということは学校選択に関わるわけですから、これもセットでお考えいただければありがたいなと思います。それで学校選択をしますと、例えば荒井さんのようなフリースクール、本当にすごいお金がかかっているわけですね。そこに来る子供もお金がかかって、という問題がございますので、それをどうすればいいかっていうのをそこにバウチャーの問題が出てくるわけですから、バウチャーのことも視野に入れて具体的に御意見を練ってお持ち寄りいただければありがたいなと思います。次回が従いましてその3点を具体的につめてまいりたいと思います。

それで現在の法制上、出来ること、出来ないことがございます。実はここに来ておられる福井委員は、日本一の行政学の大家なんです。ですから幼児教育だとか教育関係の……どこをいじればいいか、いじれないか、或いはいじらない方がいいか全部分かっております。福井さんがこうだって言う国の方もそういう制度設計をするぐらいの方です。

清水卓爾：

ちょっとお願いがあるんですが、県がやろうとしている教員評価の資料を事前に配布してもらいたい。

戸田座長：

林さんの方からじゃあ。(次回開催通知の際、事務局から資料送付する)

それじゃあここで、第一回を閉じさせていただきます。